

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520111

研究課題名(和文) 東アジアにおける翻訳語ネットワークの形成と近代学術知に関する思想史的研究

研究課題名(英文) An intellectual history study on the formation of a network of translated words in East Asia and modern scholarship and knowledge

研究代表者

桂島 宣弘(katsurajima, nobuhiro)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：10161093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東アジアにおける自他認識研究を土台として、東アジアにおける翻訳語＝日本漢語の普及を基軸とした近代学術知の成立過程を、思想史的に解明しようとしたものである。具体的には明治日本における国史学・思想史学の形成が、東アジア、とりわけ植民地朝鮮において、どのような作用・影響を与えたのかを実証的に解明し、日本思想史学と「朝鮮学・満鮮史」などの相互の関連を、ポストコロニアル問題と結びつけて分析することに努め、成果を公刊してきた。

研究成果の概要(英文)：This research, as a part of the self-other recognition research in East Asia, tried, from an intellectual history perspective, to elucidate the process of formation of modern scholarship and knowledge in East Asia, which took as its criterion the diffusion of translated words=Sino-Japanese words(kango) made in Japan. To be concrete, it explained empirically the influence and effects exercised by the formation of National History and Intellectual History in Meiji Japan on East Asia, especially on colonial Korea. It analyzed the connection between Japanese Intellectual History and "Korean Studies/Manchurian and Korean History(mansenshi) while linking it to the post-colonial discussion, and the results were published.

研究分野：人文科学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：東アジアの思想史 トランスナショナル・ヒストリー 翻訳語ネットワーク 史学史 一国史 近世帝国

1. 研究開始当初の背景

平成 22 年度まで、研究代表者は科学研究費補助金を得て、18～19 世紀の東アジア思想空間における学術用語（日本漢語）＝翻訳語の生成と自他認識の変容、東アジアにおけるナショナリズムの形成の研究に従事してきた。それらの成果は、『自他認識の思想史 日本ナショナリズムの生成と東アジア』（有志舎、平成 20 年）同書の韓国語版『東アジア自他認識の思想史』（ソウル論衡、平成 21 年）などとして公刊・公表してきた。これらの研究を通じて、中国（清）思想の展開とそれとの日韓のネットワークの構造、西洋思想とその翻訳の様相、近代以降における日本漢語の普及過程について、かなりの程度明らかにすることができた。とりわけ、『朝鮮史』編纂過程における日本側知識人の果たした役割、『朝鮮史』における近代実証主義の構造、歴史記述と植民地支配の関連については、包括的に明らかにすることができた。だが、この研究過程において、近代人文科学としての近代歴史学（国史学）の日本における成立と、それが東アジアに及ぼす作用・影響について、さらに東アジア全域を射程に入れて説明する必要性を痛感するようになった。この問題を検討することは、戦後に至る学術知の継承の問題、すなわちポストコロニアル問題を考えるためにも、重要なことであるといわなければならない。本研究は、こうした事情に鑑み、日本における近代歴史学の成立とそれが朝鮮などで果たした役割について、研究代表者がこれまで行ってきた自他認識の変容とナショナリズム形成の関わりを射程に入れつつ、思想的に明らかにしようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、申請者がこの間十数年にわたって従事してきた東アジアにおける自他認識研究を土台として、東アジアにおける翻訳語＝日本漢語の普及を基軸とした近代学術知の成立過程を、思想的に解明しようとするものである。具体的には明治日本における国史学・思想史学の形成が、東アジア、とりわけ植民地朝鮮などにおいて、どのような作用・影響を与えたのかを実証的に解明し、日本思想史学と「朝鮮学」などの相互の関連を、ポストコロニアル問題と結びつけつつ分析することが研究目的となる。既に研究代表者は、植民地期朝鮮における『朝鮮史』編纂については、多くの新史料紹介も含めて成果の一部を公刊してきた。この研究は、それをさらに発展させるとともに、中国・台湾も射程に入れて行おうとするものである。

3. 研究の方法

この研究のために用いられる方法は、日本思想史学の方法である。すなわち、文献史料に基づいて歴史認識・他者認識を克明に分析していく方法である。したがって、文研収集

が研究の中心となることはいうまでもない。ただし、ネットワークや学術知の連鎖を重視する本研究では、学術制度・人脈・知識人の行動に関わる史料を収集することが不可欠であり、そのためには東アジアにおける現在の研究者間ネットワークを用いての情報交換・意見交換・研究会とシンポジウムの開催がより重要となってくる。このことは、東アジアにおける共時性という視点を日本思想史学の中で構築していくためにも、不可欠な方法であろう。研究計画としては、文献を中心とした史料収集、日韓中（台湾）の研究者による研究会・シンポジウムの開催、情報発信としてのホームページの構築と収集史料の公表、学術雑誌の刊行、研究成果の日韓中での同時刊行が行われていくこととなる。

4. 研究成果

本研究が明らかにしてきた要点は、以下のとおりである。

(1) 国民ナショナリズム

18 世紀後期から 19 世紀後期にかけては、東アジアにおける「近世帝国」の解体過程＝国民ナショナリズム生成期と位置づけられる。国民ナショナリズムとは、古代人の想像した限定的な共同体帰属意識をテキストから読みだし、その帰属意識があたかも国民全体の古代以来の帰属意識であるかのごとく想像されることで、近代の時間相のもとで創造（捏造）(Fabrication) されたものといえる。その帰属意識の根幹には、言語・血縁・文化(情)的共同性の想像が存在しているが、古代人の残したテキストを文献学的に解明することが、実際は古代のごく一部の人の想像された帰属意識を明らかにすることで、あるにも拘わらず、それが近代に及ぼされることで「歴史的に存在してきた国民（民族）」が想像されていくことになる。これらが、自明なものとして想像されていく上では、無論、出版革命と俗語の普及、軍隊の役割なども軽視されるべきではないが、世界史的には 20 世紀にかけての国民的学問の学術的制度的成立が国民ナショナリズムの創造＝想像においては、重要なモメントであった。したがって、国民ナショナリズムは、18 世紀後期から 20 世紀初期にかけての 100 年強という長い過程をへて自明化していったものであり、最終的には帝国＝侵略戦争、学校＝近代学術、言語＝国語などの確立によって人びとの意識に深く宿るに至ったもの、と捉えられる。

(2) 近代日本の学術と中国

近代日本の学術、わけでもナショナリズムと不可分の一國史学は、本居宣長の後継として、その成立の当初から東アジア、とりわけ明示的には中国を、自己表象のための他者と措定してきた。つまり、一國史が記述され、その特質が語られる場合には、常に「日本にあらざるもの」あるいは「日本の源流」とし

て、さらに「特質を共有していないもの」あるいは「特質を共有するもの」としての東アジア、とりわけ中国が背後の主役として措定されてきたのである。無論、東アジア＝中国が他者となることの背景には、西洋のオリエンタリズムが深く影を落としており、この意味では東アジアや中国に対する西洋からの「蔑視」に対する対峙的姿勢こそが、かくなる構造を招来したと考えられる。

(3)近代日朝の相互認識

明治維新後、日本側では、オリエンタリズムや対峙的中国観とも結びついた西洋中心主義的な朝鮮属国観が広がるが、現実には中国・ロシアへの「脅威」によって、侵略は抑制された。それが取り除かれたとき、朝鮮への侵略・植民地化は現実のものとなる。朝鮮側では、近世以来の日本夷狄観を土台に、今度は西洋中心主義的それが屈折した自他像を形成することとなる。文化的優越意識＝日本夷狄観と西洋中心主義を体現した日本への戸惑い。これらを両立させるためには、中国やロシアが体現した西洋中心主義への期待が高まるのは当然であった。大韓帝国時代は、本格的な近代化への第一歩として評価されるが、日本への植民地化によって、日本が西洋近代を体現した他者として、暴力的な他者として登場する。それへの抵抗を通じて、日本夷狄観は解体され（潜伏し）、朝鮮の近代ナショナリズムは形成されていく。

(4)『朝鮮史』編修会

『朝鮮史』とは朝鮮総督府朝鮮史編修会によって編纂された、古代から高宗に至る編年体の歴史書である。1922年設置された朝鮮史編纂委員会設置に端を発し、1925年に日朝の学者を組織しての朝鮮史編修会が組織されてから本格的に編纂作業が開始された。1932年に刊行が開始され、1938年に六編35巻、24000頁余が完結した。文字どおり、日本の朝鮮に対する植民地支配を象徴する事業であり、植民地支配の中での「他者表象」を如実に示す事業であったといえる。そのため、戦後は韓国では植民地支配の負の遺産、収奪の代表的なものとして、全面的に否定された歴史書であった。事実、そうした記述や史観が存在していることは明白である（停滞史観、朝貢国＝従属国観、没主体性論＝他律性論、日朝同祖論など）。また日本側でも研究されることは少なく、ようやくにして東大史料編纂所が史料調査に乗り出した段階にある。だが一方で、『朝鮮史』編纂は、近代学術知＝近代歴史学による記述＝造作・塑型であったことも注目される必要がある（史料主義的方法、朝鮮を一個の文化共同体として捉える視点、自然人類学的な視点、王朝編年史的記述など）。そうであればこそ、『朝鮮史』編纂に関わった日本人研究者が戦後も「無反省」でいられ、何よりもこの編纂に関わった朝鮮人研究者が、解放後の歴史学のパイオニ

アとして、今度は「民族主体性」論の視点から歴史記述を行っていくことを可能にしたといえよう。したがって、『朝鮮史』編纂事業は、まさにヘゲモニー的な日本の植民地支配を象徴するものであったことは当然として、同時に近代学術自体が孕む植民地主義を示すものとして、戦後も継承され再生産され続けていることが直視されなければならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

桂島宣弘、Japanese Nationalism and the Concept of East Asia, Hallym Academy of Sciences(大韓民国)査読有、2号、2013、pp.87-105

桂島宣弘、跨國界的歴史與東亞--从日韓思想史的視域思考、南開日本研究(中華人民共和国)査読有、2012年号、2013、pp.189-204

桂島宣弘、明清王朝交替と東アジアの思想史、東アジアの思想と文化、査読有、4号、2012、pp.37-45

桂島宣弘、「領土問題」を超える地平を求めて、日本思想史研究会会報、査読無、28号、2012、pp.1-4

[学会発表](計11件)

桂島宣弘、日本ナショナリズムと東アジア(招待講演)、暨南大学国際学術研討会、2013年11月9日～10日、暨南大学(中華人民共和国広州市)

桂島宣弘、「近世帝国」の解体と19世紀前半期の思想の動向、Symposium on Early Modern Japanese Values and Individuality、2013年8月28日～31日、UBC(カナダ・バンクーバー市)

桂島宣弘、「領土問題」を超える地平を求めて(招待講演)、韓国日本学会第87回大会、2013年8月23日、嘉泉大学校(大韓民国京畿道)

桂島宣弘、日本ナショナリズムと東アジア概念(招待講演)、翰林大学校科学アカデミー国際学術シンポジウム、2013年6月28日～29日、翰林大学校(大韓民国春川市)

桂島宣弘、「近世帝国」の解体と徳川思想の動向(基調講演)、韓国日本近代学会第26回大会、2012年11月10日、立命館大学(京都府)

桂島宣弘、明清王朝交替と東アジアの思想史、東アジア文化交渉学会第4回大会、2012年5月11日～13日、高麗大学校(大韓民国ソウル市)

桂島宣弘、トランスナショナル・ヒストリーの可能性、日本研究東アジアネットワーク構築シンポジウム、2012年8月14

日、内モンゴル大学（中華人民共和国フフホト市）
桂島宣弘、トランスナショナル・ヒストリーの可能性（基調講演）、韓国日本思想史学会第30回大会、2012年7月7日、淑明女子大学校（大韓民国ソウル市）
桂島宣弘、明清王朝交替と東アジアの思想史（基調講演）、国立台湾大学文学院・立命館大学文学部国際学術シンポジウム、2012年3月22日、立命館大学（京都府）
桂島宣弘、トランスナショナル・ヒストリーと東アジア（招待講演）、南開大学日本研究院国際学術シンポジウム、2011年10月20日、南開大学（中華人民共和国天津市）
桂島宣弘、トランスナショナル・ヒストリーと東アジア（招待講演）、国立台湾大学人文社会高等研究院シンポジウム、2011年8月12日、国立台湾大学（中華民国台北市）

〔図書〕（計6件）

桂島宣弘他、本とともに（大韓民国ソウル）、宗教と植民地近代、2013、431（149-175）
桂島宣弘他、吉川弘文館、日本の対外関係第5巻、2013、328（292-304）
桂島宣弘他、岩波書店、岩波講座日本の思想第1巻、2013、302（117-149）
桂島宣弘他、三元社、植民地朝鮮と宗教、2013、369（136-160）
桂島宣弘他、ペリかん社、日本思想史講座第3巻、2012、401（367-397）
桂島宣弘他、白川書院、京の公家と武家、2011、120（64-81）

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
<http://www.ritsumei.ac.jp/kic/~katsura/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桂島 宣弘（KATSURAJIMA, Nobuhiro）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：10161093

(2) 研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：